

# Henry VI 三部作の諸様相

山 際 巖

## 〔I〕

Henry VI 三部作は内紛と無秩序の破壊的作用を描き、その悲惨と恐怖を表現することによって、秩序と国家的統一の必要を訴えている。<sup>(1)</sup>それでは無秩序と混乱を生んだ原因として何がここに示されているであろうか。私はこれを三つの次元で考えてみたい。

まず第一の（必ずしも最も重要という意味ではない）原因は国王の人物と王位継承権にある。すなわち一方において、Henry VI は弱い性格の持主であり、信仰心のあつい善良な人間であったが、反逆的な貴族たちを抑えて国家的統一を維持してゆくだけの政治的力量がなかった。他方において、彼には Richard II を廃位させた Bolingbroke の孫としての負い目があった。

Henry の性格的特徴をいくつか瞥見してみよう。まず眼につくのは彼の感情過多と心理的な未成熟である。この性格的欠陥は Margaret を王妃として迎える前後の彼の言動によく示されている。彼にはすでに別の婚約者があるので Duke of Gloucester (Humphrey) はこの結婚に反対する。国王が同意を求めると彼は「同意すれば罪をごまかすことになります」と答え、また婚約解消が Henry の「名誉をけがす」と諫言する。Henry が罪を犯し名誉をけがしてまでも Margaret と結婚したいと思いはじめるのは、Suffolk の巧みな弁舌のためである。Suffolk の彼女を讃美する言葉を聞いただけで、Henry はまだ会ったこともない女性に激しく恋し、悶悶として孤独を求める。

And so, conduct me where, from company,

I may revolve and ruminate my grief. (I. 5. 5.100-101)

この ‘grief’ の意味は J.D. Wilson も注を与えているように ‘the pangs of love’ である。そこには国王らしい威厳どころか、成熟した大人にふさわしい態度さえ見られない。

Agree to any covenants, and procure

That lady of Margaret do vouchsafe to come…

などと節度のないことを言うにいたっては論外である。あとになって理解されるように、このような言質を与えてしまったために英国は Anjou と Maine の duchy を失うのである。

だから実際に彼女自身を眼の前にした彼女の言葉を聞きもしたとき、初対面であるにもかかわらず彼が有頂点になるのも無理はない。

Her sight did ravish, but her grace in speech,

Her words y-clad with wisdom’s majesty,

Makes me from wond’ring fall to weeping joys… (II. 1. 1. 32-34)

この台詞が独白であるのとそうでないのとでは大きな差異が生ずるのであるが、残念なことにこれは独白でなく、彼は廷臣たちの前に自分の infatuation を慎しみなくさらけ出すのである。これと対照的なのは第三部で King Edward が Lady Grey を前にして彼女の美しさに讃嘆するところ (3.2. 84 以下) である。Edward の場合は独白であり、しかも Lady Grey をできれば愛人にしようと駆引きをするあたりは大人らしい落ち着きを見せている。

次に眼につく欠陥は彼の観念性である。Humphrey の死について Suffolk と Warwick が激しい口論をたたかわし、決闘をするために舞台裏へ出てゆく

とき、Henry にはそれを制止するだけの力もなく、また制止しようと努力するわけでもない。ただ彼は嘆息とともに非現実的な感想を述べるだけである。

What stronger breastplate than a heart untainted !

Thrice is he armed that hath his quarrel just,

And he but naked, though locked up in steel,

Whose conscience with injustice is corrupted. (II. 3.2. 232-235)

これは *Henry VI* のなかで最も有名な台詞の一つであるが、彼の性格の一面をよく説明している。これが観念論であること、またこの観念論がいかにものろいものであるかは、彼自身が辿る惨めな運命によって（最後には ‘Whose conscience with injustice is corrupted’ という形容がそのままあてはまる兇悪な Richard に刺されて死ぬことによって）証明されるだけでなく、この台詞が置かれた直接的な文脈によっても、ただちにしかもかなり明確に観客によって感知される。すなわち隣の部屋には Suffolk の陰謀によって暗殺されたばかりの ‘good’ Humphrey の死体が横たわっており、彼の死を Henry はたった今嘆き悲しんだばかりなのである。彼がいかに容易に現実を忘れるか、いかに現実から背を向けたがっているかはこのことによっても理解される。彼の自己欺瞞の空しさが観客にすぐ感知されるような文脈にこの台詞がはめこまれている点に注目したい。

だから彼が王位を継承しなければならなかったことすら、彼にとってはこの上ない不幸と考えられるのである。

I'll leave my son my virtuous deeds behind;

And would my father had left me no more !

For all the rest is held at such a rate

As brings a thousand-fold more care to keep

Than in possession any jot of pleasure. (II. 2. 2. 49-53)

王位が *care* をもたらすのみですこしも *pleasure* を与えないということは、彼の祖父が病の床で、また彼の父は Agincourt の戦いの前の夜に、それぞれ嘆息して述べていることであるが、Henry VI の場合は独得の意味をもっている。すなわち彼の祖父は王位篡奪という行為の生んだ結果と必死になって闘ったし、彼の父は国王として担わねばならない責任を立派に引き受けたのである。それにくらべ Henry VI はいつもきびしい現実から逃げようとし、また実際逃げまわってばかりいた。ここにもまた国王としての資質にかかわる問題がある。だから

Was never subject longed to be a king

As I do long and wish to be a subject. (II. 4. 9. 5-6)

という台詞が示すように、彼もまた Richard II 同様に、事実上 dethrone される以前にすでに自分を心理的に dethrone してしまうのである。

彼の致命的欠陥は「強さ」がないことである。国王に *strong character* がなければ、服従と忠誠を要求する *strong government* は不可能である。彼の *government* は次のようなものであった。

…my meed hath got me fame:

I have not stopped mine ears to their demands,

Nor posted off their suits with slow delays;

My pity hath been balm to heal their wounds,

My mildness hath allayed their swelling griefs,

My mercy dried their water-flowing tears;

I have not been desirous of their wealth,

Nor much oppressed them with great subsidies,

Nor forward of revenge, though they much erred:

Then why should they love Edward more than me?

この台詞には、Henry VI が理想と考えまた実践もした政治(=支配の形態)が要約されている。J.D. Wilson は “...its smug complacency contrasts sharply with the sad humility of Henry elsewhere…” と論評しているが、<sup>(2)</sup>ここで Henry が得々として語る彼の善政はみな事実であって、額面通りに受取って差支えないであろう。しかし、これらの善政と美德にもかかわらず、というよりはむしろこのような善政と美德のゆえに、彼には重大で致命的なものが欠けていたのである。彼は国王として、自分の ‘pity’, ‘mildness’, ‘mercy’, ‘graces’ について自己満足的に語る前に、まず自分の支配の弱さを問題にすべきであった。‘mildness’ などというものは国王にとってむしろ悪徳であると考えてもよい。彼の政治はなるほど oppressive ではなかったかもしれない。しかし彼の誇る ‘pity’, ‘mildness’, ‘mercy’ などが結果的には無秩序と混乱を生み、かえって英国の民衆を悲惨な状態に陥れたとも言えるのである。

上に引用した台詞のすぐあとに続く二行はまったく突飛な錯覚というほかはない。

And when the lion fawns upon the lamb,  
The lamb will never cease to follow him.

Henry は自分を lamb にではなく lion に譬えているのである。このような自己欺瞞のすぐあとで（というよりはその最中に）彼が King Edward と Richard に拉致されるのは一つの dramatic irony である。

## 〔Ⅱ〕

次に問題になるのは王位にたいする Henry VI の title が弱いことである。Warwick はそれを指摘するのに ‘prescription’ という概念を用い、Henry を擁護する Oxford にたいし

…you tell a pedigree

Of threescore and two years—a silly time

To make prescription for a kingdom's worth. (III. 3. 3. 92-94)

と反論する。*Henry V* のなかでは Lancaster 家の prescription がほとんど問題にならず、むしろ注意深く言及が避けられていた。*Henry V* は usurper の後継者であったが、それにもかかわらず彼の王座はかなり強固であった。それは彼に国王としてのすぐれた資質が備わっていたからである。*Henry VI* は直系の血縁によるそのまた後継者であるから、王位にたいする彼の prescriptive right は既成事実によって父の場合よりも有効となるはずである。*Henry IV* よりも *Henry V*, *Henry V* よりもさらに *Henry VI* と、Lancaster 家の王座は prescription によって次第に安定してゆくべきはずである。ところが実際にはそうならないことを考慮に入れるならば、*Henry VI* の王位にたいする title よりも、むしろ国王としての彼の統治能力に問題があるということになる。

*Henry VI* 三部作のなかでも *Henry V* という名前と彼の記憶はときどき大きな役割をはたしている。そして彼にとって不利な言辭は注意深く避けられている。英国の national prestige を最高に高めた *Henry V* の memory は神聖であり、彼の死後もその力は無視できない。York 派の人々でさえ、また Cade およびその一味の者たちでさえ、この英雄の名声をけがすことはできない。例えば Jack Cade の場合を見よう。暴動が激しくなるにつれて、彼は次第に図に乗って（使者が間接的に伝えるところによれば）Westminster で即位すると公言し (II. 4. 4. 31), さらに自分を指して 'my majesty' と呼ぶようにさえる。しかし彼も最初はそれほど大胆な主張をすることができなかった。説得と鎮圧にやって来た貴族たちにむかって

Go to, sirrah, tell the king from me, that, *for his father's sake,*  
*Henry the fifth*,…I am content he shall reign; but I'll be Protector

over him.

(II. 4. 2. 153-156)

と言う。Lancaster 家の title に疑義ありとする立場の人たちも Henry V だけは別格に扱うのである。

だからこそ Clifford もまた Henry V の名を口にして、その偉業の消しがたい想い出を利用するのである。

Who hateth him and honours not his father,

Henry the Fifth, that made all France to quake,

Shake he his weapon at us and pass by. (II. 4. 8. 16-18)

この台詞では、フランス征服者としての Henry V が国民的英雄であるということは、Clifford にも叛徒たちにも共通する意識であることが前提とされている。Clifford の弁舌が効を奏したのは、Henry V の memory を利用したからであり、また叛徒たちの国民感情に訴えたからであるが、これら二つのことは離れがたく結びついているのである。Henry V は nationalism の象徴であった。

The name of Henry the Fifth hailes them to an hundred mischiefs  
and makes them leave me desolate. (II. 4.8. 56-58)

と Cade が嘆息するのはもっともなことで、場面全体は comic なものであるにもかかわらず、この二行の台詞は笑えないものを含んでいる。

だから Henry VI はこのような事情を利用して、自分が Henry V の子であることを強調し、父の威信をかりることによって自分の立場を補強しようと試みるのである。それがうまくゆかないのは問題がやはり国王としての資質にあるからである。

王位にたいする title について Lancaster 家と York 家とではどちらが強

いかということについて、*Henry VI* 三部作の作者は結論を与えていない——と主張する批評家もあるが、私はそうは思わない。*York* は自分の title を絶えず主張し、一方肝心の *Henry* 自身は自分の title が弱いことをしばしば意識している。*Henry* だけでなく彼に味方する人々もそうである。(もちろん、このことは *de facto* の king にたいする忠誠の要求と矛盾するものではない。)

London の Parliament-house で、*Warwick* が *Henry VI* にむかって彼の title が lawful であることを証明せよと迫る (III. 1. 1. 130 以下) ときの対話を引用してみよう。

*King Henry.* My title's good, and better than his.

*Warwick.* Prove it, Henry, and thou shalt be king.

*King Henry.* Henry the Fourth by conquest got the crown.

*York.* 'Twas by rebellion against his king.

*King Henry.* (Aside) I know not what to say; my title's weak.

Lancaster 家の人々でさえ誰一人としてここで *Henry* の title が正当であると弁護する者はいない。*Clifford* が彼に忠誠を誓うときの言葉 (III. 1. 1. 159-160) は示唆的であって、「*Henry* が lawful king であるから」彼に味方をするとは言えず、「*Henry* の title が wrong であったとしても」彼のために闘うのだと言わざるをえないのである。

*Henry* は自分の死後王位を *York* に譲ることを誓約したが、これを咎める *Clifford* の台詞 (III. 2. 2, 9-42) も一考に値する。すなわち、*Henry* が自分の子を disinherit し、敵方に王位を譲る約束をしたことにたいする *Clifford* の批判は、*Henry* 自身の言葉をかりると 'arguments of mighty force' なのであるが、その中にも王位にたいする *Henry* の権利には一言の言及もない。*Clifford* としては以前から首尾一貫した立場なのである。34行にも及ぶ長い諫言の大部分(18-42行)はもっぱら父子の情に訴えようとするものである。政治



的な論議をぬきにして、もっぱら個人的な情愛に訴えようとするこの忠告は、王位にたいする彼ら（Lancaster 派の人々）の関係と立場をよく物語っている。

Clifford にたいする Henry の返答はかなり露骨なもので

But, Clifford, tell me, didst thou never hear

That things ill-got had ever bad success?

And happy always was it for that son

Whose father for his hoarding went to hell? (III. 2. 2. 45-48)

つまり彼が現に戴いている王冠はもともと ‘ill-got’ であるとされ、この文脈の中では Henry V もひどい取り扱いをうけている。だから彼は ‘things ill-got’ を自分の子供に譲りたくないと言い、また父からも譲られなかったほうがよいと嘆くのである（49—50行）。

このような Henry でも一度だけ国王らしく振舞う場面がある。それは Suffolk の追放を決意しそれを実行するときである。彼はそのとき自分が地上における神の代理者であることを少しも疑わず、また祖父の犯した罪もすっかり忘れている。

…by His majesty I swear,

Whose far unworthy deputy I am… (II. 3. 2. 285-6)

彼としては珍らしく、ここでは君権神授説をふまえて発言している。彼が君権神授説を信じていけないわけではない。彼は Westminster で consecrate されて即位した ‘the anointed of the Lord’ であり、同じく consecrate され anoint された国王たちの直系の孫であり子なのである。（だから彼に反旗をひるがえす York はそのことによって神に叛くのであり、York の行為が sacrilegious であることは否定できない。）しかし彼がそれを口にするとそれが彼の立場を補強するよりむしろ君権神授説の観念的な空しさを印象づける。

この台詞は Henry の性格ないし思想とは本質的にあまり関係がない。この

とき Henry の置かれた事情が彼にそのような言動を許すのである。彼は今民衆に支えられている。すくなくともここでは Salisbury も民衆を代弁している。Warwick も Suffolk と決闘するつもりになるほど彼を憎んでいる。だから Henry はめずらしく Margaret にたいしても毅然とした態度をとり、国王らしくまた夫らしく振舞うことができる (II. 3. 2. 290-294) し、Suffolk にたいしても断固として追放の命を下す (3. 2. 295-297) ことができる。しかしここで Margaret および Suffolk にたいする言葉に見られる勇しい調子は Henry にそぐわないものであって、彼の性格に根ざすものでないことは明瞭であるから、かえって衰れを催すのである。

### 〔III〕

Henry VI の title という問題を考察しようとするれば、どうしても Richard II にまで歴史的に遡って考えなければならないし、また作品 *Richard II* にも触れなければならない。

Edward Hall の著わした *The Union of the Two Noble and Illustre Families of Lancaster and York* (1542) は Henry VI の紛本の一つとされている。この書物は国家主義的な史観に基いて書かれており、一貫した理念がすべての内容を支配していると言われている。<sup>(3)</sup>すなわちそれは歴史が神の摂理による因果応報によって発展するという理念である。Bolingbroke は神の代理者である Richard II を dethrone することによって神に反逆した。Henry IV の在位中にも彼の犯した sacrilege にたいする神罰は貴族たちの叛乱、Prince の無軌道ぶりその他の形で現われるが、統治者としての努力を怠らなかつたために、神の窮極的な retribution は後代まで留保された。Henry V は父の犯した罪を絶えず意識し、Richard の追善につとめ、国政に心をくだいたために、神の retribution はさらに留保された。しかし Henry VI の治世になって神の応報が訪れはじめる。そして Richard III の死によって神の応報が完成し、すべての crime は消滅し、York 家と Lancaster 家の結合によって新しい秩序が生まれた。

Edward Hall の以上のような歴史観について Irving Ribner は次のように述べている。<sup>(4)</sup> “The Providential view of history is, of course, an old and commonplace one. Hall’s interpretation of the Wars of the Roses in the light of it, however, belongs particularly to the age in which he wrote and to the particular political prejudices to which he catered.” しかしここで I. Ribner の言う “the particular political prejudices to which he catered” は歴史的に見れば積極的な意味をもっていた。すなわち英国は Henry VIII の時代に国民国家としての完全な独立と統一をなしとげ、その中央集権国家の頂点に位するのは Edward Hall が熱烈に支持する Henry VIII だったからである。神の摂理とか応報とかいう中世的な衣裳をまとうてはいるが、国家主義的なその内容は新しい時代の要請に答えるものであった。

劇作家といえども歴史劇を創作するときには歴史家としての眼をもたねばならない。それでは、Bolingbroke の sacrilege にたいする神の vengeance が Henry VI とその治下の England に訪れはじめたという歴史観が、Henry VI 三部作にはどの程度反映しているであろうか。この作品のなかで Bolingbroke による usurpation への言及がなされていることは確かであるが、それが上述のような因果応報という文脈の中にはっきりとは置かれていない——というのが私の感想である。すなわちこの作品はそれなりにかなり自己完結的な世界を形成しているように思われるのである。その原因としてはまず歴史劇の chronological order (Henry VI 三部作はいわゆる ‘Lancastrian cycle’ の中で最も早く創作されたものである)とか、各作品を self-contained なものにする劇作上の必要性などが考えられよう。しかし私には、もう一つの理由が作品 *Richard II* そのものの中に示されているような気がする。

*Richard II* のなかで Shakespeare が Richard にたいする観客の同情を要求し、Bolingbroke の罪を強調していることは確かである。しかし同時に Shakespeare は Richard の性格的欠陥を遠慮なく描写し、彼が国王としての職務を怠ったことをきびしく指摘し、一方 Bolingbroke の実力と人望につい

て語っている。ほんの一例を挙げるならば、chorus 役の Gardener は次のように Richard を批判する。

…our sea-walled garden, the whole land,  
Is full of weeds, her fairest flowers choked up,  
Her fruit-trees all unpruned, her hedges ruined,  
Her knots disordered, and her wholesome herbs  
Swarming with caterpillars… (3. 4. 43-46)

くり返して言うけれどもこれは一例にすぎない。もし Bolingbroke の罪を力説したければ Richard の失政をそれほどまでに追及しないほうがよいように思われる。Richard の無能と気まぐれから生ずる英国の混乱と腐敗、貴族や民衆の離反を強調することは、もちろん Bolingbroke を正当化しないし彼に免罪を与えもしないが、すくなくとも結果的に彼の罪をいくらか相殺することにならないだろうか。それに加えて次の事情も考慮する必要がある。“Indeed, in Shakespeare’s play—if not exactly in the chronicles—Richard surrenders the crown more than Bolingbroke snatches it from him.”<sup>(5)</sup> 要するにこの作品で Shakespeare は一つの dilemma——君権神授の思想と patriotism の矛盾——に直面しているのである。

もちろん私は、*Henry VI* 三部作が創作された時点で、すでに *Richard II* の構想が出来あがっていたなどと言うのではない。恐らく Shakespeare は形而上学的な歴史の理念というものに最初からあまり関心をもたなかったのではないかと考えるのである。そしてこのことは Shakespeare が歴史を観る眼をもっていたことと矛盾するものではなく、むしろ彼に確かな方法があったことと consistent である。かりにばら戦争時代に England の蒙った苦難の窮極的原因を Bolingbroke の usurpation に求めるとしても、それを politics の次元で現実的に考察することと、a priori な理念で考察することとは別問題である。言い換えれば、内乱の原因を示すのに、社会的な諸要因諸勢力の相互媒

介的な作用を描くことと、歴史の過程をいわば演繹的に論ずることは、全然別の事柄である。

I. Ribner もまた *Henry VI* 三部作が内容的に見て ‘second tetralogy’ から相対的に独立しているという意見である。彼は “The violations of divine harmony and order—the sins for which England must suffer—which Shakespeare does emphasize are those committed within the *Henry VI* plays themselves” と指摘し、いくつかの例を挙げたあとで、 “It is partly because Shakespeare emphasizes the sins committed during the reign of Henry VI rather than the initial crime against Richard II that I cannot share Tillyard’s view that the *Henry VI* plays and *Richard III* form one vast epic unit with the second tetralogy he was to begin some five or six years later to cover the years from Richard II to Henry V” と Tillyard を批判している。<sup>(6)</sup>

すなわち first tetralogy と second tetralogy は、いずれもいわゆる ‘Tudor Myth’ という枠の中にはめこまれているが、それぞれ独立した ‘a self-contained unit’ であるというのである。そしてそれぞれの作品群の中で、犯された罪とその罪によって蒙る England の苦悩は、形而上学的な衣裳をまとうこともあるが、内容的にはまったく歴史的な意味での因果関係に他ならない。与えられるものは具体的かつ現実的な諸矛盾の展開である。

#### 〔IV〕

英国を混乱と無秩序に陥れた第二の原因は貴族たちの不和と軋轢である。1422年9月 Henry V が死んだとき、そのあとを継いだのはわずか生後9ヶ月の Henry VI であった。彼の運命と英国の運命は大貴族たちの手中にゆだねられた。中でも有力なのは Protector の Humphrey (Duke of Gloucester), 幼い国王の guardian である Henry Beaufort (Bishop of Winchester), フランスの Regent となった Duke of Bedford などであった。 “...the kingly power which Henry IV had fought so hardly for, and Henry

V had kept and increased by his own winning qualities and the fame of foreign victories, was now by force of circumstances given back to the great nobles. We shall see how they used it to wrack their country and in the end to work out their own perdition.”<sup>(7)</sup>

Henry V (1413年即位) が積極的に対仏戦争を開始し(1414年) 次第に仏軍を破って Troyes の条約が結ばれる(1420年) まで、英軍が勝利をおさめた原因は、一方において英国では国王のもとに権力が集中していたのに、他方においてフランス側では貴族たちの間に対立があったためである。ところが Henry VI の時代になると事情はちょうど逆になった。フランス側には国民的な自覚が生まれはじめた。Charles VII を支持したフランス国民各層のうち、農民の代表は Jeanne D'Arc であり、商業ブルジョアジーの代表は Jacques Coeur といえることができる。Jacques Coeur はフランスにおける王権とブルジョアジーの同盟関係を象徴する人物であり、Jeanne は下層階級の出身であるからフランス側における nationalism の象徴であると言えよう。一方 Henry VI の時代における英国では大貴族たちに権力が分散し、しかも彼らは私利私欲あるいは私怨私憤にしたがって行動していたのである。このような英国側の事情が *Henry VI* 三部作のなかで詳しく描かれている。

この作品にみられる貴族たちの政略、陰謀などは、多くの場合王位の継承をめぐるものであるから、彼らの軋轢のそのまた原因は窮極的には Bolingbroke の犯した罪にあると言えないこともない。しかし「国王の title が弱いから貴族たちが反逆する」という表現は多少不正確である。つまり国王の title の問題は根本的な背景ではなく、反逆の直接的きっかけとなったり、あるいはその口実を与えるにすぎない。例えば Henry VI の weak title を口実にして彼に背く貴族もあれば、先に述べたように weak title を承知しながらも彼に最後まで味方する Clifford のような例もある。だから貴族たちの反逆的傾向は本質的には別なところから由来するものである。ただしこれは歴史的な観点であって、その観点がこの作品でどれだけ具体化されているかということは別問題である。この作品では、封建貴族たちの分離的傾向、国家的統一への志向が

欠如していること、私的な動機で離合集散することなどが、いわば彼らの体質として批判的に示されているが、われわれはそれで充分としなければならない。以下三人の代表的な貴族を例にとりあげて彼らの意識を考察してみよう。

Suffolk が個人的な動機で Henry と Margaret との結婚を画策したことについて、A. T. Quiller-Couch は次のように述べている。<sup>(8)</sup>「しかし Suffolk は一つのことを無視していた。それは英国人民の気分である。Suffolk もその他の貴族たちも国家の名誉というものをまるで動産のように個人的な目的のために売渡した。しかしイギリス人の大部分は Henry V のもとで英国を誇りにすることを学んだ。英国の偉大さが汚され、それが自分本位の利害で売買されるのを見たとき、彼らのこの誇りは激しい怒りになった。」民衆のこの怒りが頂点に達するのは Humphrey が彼によって謀殺されたときである。その様子を Warwick は次のように伝えている。

The commons, like an angry hive of bees

That want their leader, scatter up and down

And care not who they sting in his revenge. (II. 3. 2. 125-127)

すなわちここには売国的な Suffolk と、彼が ‘rude unpolished hinds’(II. 3. 2. 271)あるいは ‘a sort of tinkers’ (II. 3. 2. 277)とさげすみ罵った素朴な民衆との対立が示されている。「彼は英国全体の意見を過小評価するという誤りを絶えずおかしていた。女王のお気に入りであるということ、またこのことが国王をめぐる狭い奥まった世界で彼に勢力を与えていること——これが彼の頼みであった。いかなる国王も忘れてたり無視したりすれば必ず不運に見舞われるもの——それを彼は忘れていた。でなければそれを無視できると考えていた。Margaret はフランスの女性であるからこれを無視してもあるいは許されもしよう。Suffolk は大封建領主たちの伝統に従ってこれを無視した。彼らはその伝統によって庶民とその感情をつまらぬものとして扱い、それによって破滅したのである。」<sup>(9)</sup>

Suffolk にたいする観客の気持は第二部四幕一場で彼を捕えた Lieutenant が充分に代弁している。国王と England にたいする愛情, Anjou と Maine が失われたことで傷ついた英国人としての自尊心などについて、彼は 71-93 行で語っている。すなわち国民的な自覚という点で庶民の代弁者であるこの Lieutenant は Suffolk よりもはるかに先んじている。

Ireland で反乱が起ったとき、それを鎮めるための司令官として York は Sommerset を推薦するが、Cardinal は York を推薦する。結局 York がこれを引き受けることになるが、そのときの彼の言葉

I will, my lord, so please his majesty. (II. 3. 1. 315)

と、これに comment を加える Suffolk の言葉

Why, our authority is his consent,

And what we do establish he confirms;

Then, noble York, take thou this task in hand. (3. 1. 316-318)

の間には示唆的な対照がある。君主というものが実質的な存在ではなく、単に名目的な存在にすぎないとする封建領主に特徴的な意識がこの台詞によってよく理解される。それはもちろん単に彼の個人的性格からのみ説明されることでなく、そこには歴史的な文脈を背景にもつ意識が存在しているのである。

“In his plays, the barons who are masters of fiefs—the most powerful of them is the Earl of Warwick in *Henry VI*—try to control the king, whom they call God’s anointed in name but look upon as only the first among equals.”<sup>(10)</sup>これにたいし York がたてまえを一応みとめて主権者としての君主という fiction を尊重しているのは、彼がいわば国王の影という存在であるという事情によっている。

Winchester の売国的な性格と役割も明瞭に示されている。*King John* の場



合とはちがって、*Henry VI* 三部作の場合王権と Papacy との対立が観客の真正面に据えられることはないが、Papacy の暗い影は Winchester の背後で不気味にうごめいている。彼が Pope の使節に向かって言う台詞 (I. 5. 1. 51-54) から察すると、彼は Cardinal の地位を Pope から金で買ったことになる。この僧侶について次のような Henry V の (当然のことながら Henry V という名前が当時の観客にたいしてもっていた重いひびきを忘れてはならない) 予言を紹介する Exeter は、このときも chorus 役を演じていることを考慮せねばならない。

If once he come to be a cardinal,  
He'll make his cap co-equal with the crown. (I. 5. 1. 32-34)

教会の代表者であるこの男の Humphrey にたいする憎しみは激しく、Pope の使節が立ち去ったあとの独白でその憎悪を露骨にさらけ出すが、その台詞の最後に見られる「Gloucester を屈服させ跪かせるためには、内乱でこの国を破滅させても構わない」という途方もない決意もまた象徴的である。

彼が死に瀕しているときの言葉は、それが無意識のうわ言であるために、またしても彼の黒く濁った心の奥底をのぞかせてくれる。

If thou be'st Death, I'll give thee England's treasure,  
Enough to purchase such another island,  
So thou will let me live, and feel no pain. (II. 3.3. 2-5)

これを聞いた観客はおそらく、この僧侶が憎んでやまない 'good' Humphrey の愛国的な台詞を想い出したにちがいない。

And if my death might make this island happy,  
And prove the period of their tyranny,

I would expend it with all my willingness. (II. 3. 1. 148-158)

印象に残る対照である。

‘King-maker’ という epithet も示唆するように, Warwick は feudal lord の典型であり, また最も有名な典型である。“Feudalism was doomed, but in Warwick it died, if not nobly, at any rate magnificently. He was its fine flower and its grandest type… When he rode to Parliament six hundred retainers, wearing his badge…, followed at his heels. Thousands feasted daily in his courtyard. He could raise whole armies from his own earldoms. In generalship and (some said) in personal courage he might fall short of York’s two sons, Edward and Richard, but he was an active warrior none the less, and for intrigue and politic dealing the first head in the kingdom.”<sup>(11)</sup>

彼が King Edward の使者としてフランスに赴き, Edward の王妃として King Lewis の妹 Bona を迎えたいという希望を述べたとき, その同じ宮廷へ Margaret と Prince Edward (Henry VI の子) がすでに到着しており, Henry VI の援助を King Lewis に嘆願していた。そこで Warwick は抗議する Prince Edward にむかって

…thy father Henry did usurp. (III. 3. 3. 79)

と答えるが, King Edward が Lady Grey と結婚するという報知に接してすっかり面目を失い

Did I impale him with the regal crown?

Did I put Henry from his native right?

And am I guerdoned at the last with shame? (III. 3. 3. 189-191)

と憤慨する。Henry VI が usurper であると公言したばかりなのに、同じ人物に囲まれた同じ場面で、わずか 110 行後に Henry VI が王位にたいする 'native right' をもっているというふうに見解が一変する。王位継承の問題がこの封建貴族にとってどういう意味をもっていたかは明らかである。この問題に関する彼の議論は、この場面以前についても以後についても、一切の説得力を失ってしまう。封建貴族の反逆的な傾向が基本的な背景であって、国王の title という問題は直接的な要因であるという事情は Warwick の去就向背にうかがうことができるのである。

## 〔V〕

ここでついでに忠誠観というものを考察してみよう。封建時代の忠誠は直属の領主にむけられ、必ずしも国王がその対象ではなかった。つまり家臣たちにとって領主が誰に奉仕しようとそれは自分たちにとってどうでもよいことであつた。国家的な統一を妨げるこのような封建的忠誠観を G. B. Shaw は *Saint Joan* のなかで Robert という武人に語らせている。そこでは nationalism の象徴であり民衆の代弁者である Joan が神にたいする義務のみを問題にし、それと対照的な形で Robert が伝統的な忠誠観を述べている。

ROBERT. Dont you know that soldiers are subject to their feudal lord, and that it is nothing to them or to you whether he is the duke of Burgundy or the King of England or the King of France?  
JOAN. I do not understand that a bit. We are all subject to the King of Heaven; and He gave us our countries and our languages, and meant us to keep to them. If it were not so it would be murder to kill an Englishman in battle; and you, squire, would be in great danger of hell fire. You must not think about your duty to your feudal lord, but about your duty to God.

実に明快な論理であるが、Joan のいう「神にたいする義務」とはいったい何であろうか。それは第二幕の終りになって明瞭になる。Charles にたいする彼女の言葉を聴いてみよう。“And I come from God to tell thee to kneel in the cathedral and solemnly give thy kingdom to Him for ever and ever, and become the greatest King in the world as His steward and His bailiff, His soldier and His servant. The very clay of France will become holy: her soldiers will be the soldiers of God: the rebel dukes will be rebels against God…” すなわち神にたいする義務とは、feudal lord を中間に介在させない、国王にたいする直接的な忠誠と同義になるのである。このような考え方がいかに「危険な」ものであるかはほかならぬ feudal lord の典型である Warwick (ただし G. B. Shaw が描くところの) が最も鋭く察知している。第四幕の終りで彼は彼女の考え方を、“Her idea is that the kings should give their realms to God, and then reign as God’s bailiffs. …It is a cunning device to supercede the aristocracy, and make the king sole and absolute autocrat. Instead of the king being merely the first among his peers, he becomes their master. …Nominally we hold our lands and dignities from the king…” と評する。Nationalism という立場が封建貴族たちとどのような関係にあるかということについても、当然のことながら彼が最も明敏に把握している。“Men cannot serve two masters. If this cant of serving their country once takes hold of them, goodbye to the authority of their feudal lords…”

例えば Warwick が York 側から Henry 側に寝返っても、Warwick に従う人々は彼にのみ忠誠をつくせばよいのであって、Warwick が誰に味方するのかは問題にならない。Robert の台詞に相当するような箇所を Henry VI に見ることはできないが、そのような忠誠が貴族たちの離合集散の前提になっていることは言うまでもない。戦場で父を殺した息子の悲劇 (III. 2. 5.) はこのような封建的な loyalty が生んだものである。息子は London から国王の名によって impress された。父親は Warwick に impress されて York 側

についた。そして息子は激戦の最中にそれとは知らず自分の父親を殺してしまうのである。

一方国王にたいする直接的な民衆の *loyalty* が示される場面もある。興奮した民衆が *Suffolk* の追放を要求する場面がそれである。ここではたまたま *Salisbury* が彼らの代弁者として機能するのであるが、彼は彼らの動機を ‘mere instinct of love and loyalty (II. 3. 2. 250) あるいは ‘in [care of your most royal person’ (254) と説明し、また *Henry* も “I thank them for their tender loving care” (280) と感謝の気持を述べる。

もっとも民衆の *loyalty* についてはまた別の面も強調されている。 *Henry* が *depose* された後の民衆の動向について、死に直面した *Clifford* は

The common people swarm like summer flies;

And whither fly the gnats but to the sun?

And who shines now but Henry's enemies? (III. 2. 6. 8-10)

と慨嘆する。民衆を ‘summer flies’ あるいは ‘gnats’ に譬えるところは彼の貴族的な気質を示しているが、彼は無意識のうちに半ば民衆のために弁解していることに気付かない。彼らが庇護者として「強い」者を選ぶのは当然であり、彼らの立場は自分自身の軍隊をもつ貴族の立場とは異なるのである。移り気とか無定見とか言われるものも、結果を受容してゆくより仕方がない民衆自身の立場に立てばまた別のものでありうる。

やはり *depose* されたあとで、北部イングランドのある獵場の管理人にむかって、*Henry* が忠誠の問題を論じるところがある。

I was anointed king at nine months old;

My father and grandfather were kings,

And you were sworn true subjects unto me:

And tell me, then, have you not broke your oaths? (III. 3. 1. 76)

これにたいする管理人の答は興味深い。彼は *homage* の誓約に背いたとは考えず、その論拠は

For we were subjects but while you were king.

である。つまり民衆の一人である彼にとって、国王とは機能的 (functional) な存在であって実体がない。すなわち国王は *kingship* の具体化ないし人格化したものであり、忠誠の対象は *kingship* にたいするものであって *person* としての国王その人ではない。このような考え方からすれば現在の国王が *lawful* であろうと *illegal* であろうと、すぐれた国王でありさえすれば問題にならない。だから Henry が ‘the lightness of …common men’ (III. 3. 1. 89) について嘆くとき、ある意味でそれは妥当であるが別の意味では妥当でない。このように *king* というものを抽象的に機能化することは、*de facto* の *king* に忠誠をつくすべしという現実受容主義と一脈通ずるものがある。だから

*1 Keeper.* We are true subjects to the king, King Edward.

*Henry.* So would you be again to Henry,

If he were seated as King Edward is.

という対話は、単に Henry の言う民衆の ‘lightness’ (=fickleness) 以上のものを——すなわち一つの *grim truth* を——含んでいる。

これと同様な感想を抱かせるのが *Suffolk* を捕えた *Lieutenant* の台詞である。彼は *Yorkist* であるのに Henry VI を ‘our king’ と呼ぶような矛盾をおかしている。彼は愛国者として *Suffolk* を憎んでいる。その点はよく理解できるのだが、一方で Henry VI を ‘a mighty lord’ (II. 4. 1. 80) と呼び、他方で *Yorkist* の *Warwick* を ‘princely Warwick’ (91) と呼んでいる点が理解しにくい。*Yorkist* として *Warwick* と *Salisbury* の挙兵を支持

しているかと思うと、‘our king’ としての Henry VI を代弁したりする。彼は愛国者としては現在の統治者 Henry VI を支持してその立場で Suffolk を批難し、Yorkist としては全然別の立場に立って Suffolk を批難する。この矛盾に Lieutenant 自身が気付いていないということは観客もまた気付いていないことを意味する。彼は Richard II の廃位と謀殺にも言及するが、Yorkist たちの ‘revenging fire’ が Henry VI にではなく、あたかも Suffolk に向けられているかのような文脈であるのも面白い。この矛盾ないし矛盾の無視は何を意味するのであろうか。Henry VI は de facto の国王として England の象徴であり、やはりその意味で機能化されているような気がするのである。

## 〔VI〕

英国を混乱に陥れた第三の原因は Jack Cade の反乱に象徴される民衆の動きである。そこで以下彼が活躍する諸場面を中心に、この作品における民衆の形象化を考察してみよう。

Jack Cade および彼に従う庶民たちは喜劇的に仕立てあげられ、嫌悪とか憎しみの対象とはなっていない。むしろ彼らにはそれなりの魅力があり、彼らの奔放な言動は精彩をはなっている。つまり劇の登場人物として (moralization の道具としてではなく) 彼らを見るとき、否定的形象か肯定的形象かというふうに問題を割り切るだけでは、内容の貧しい議論になる。つまり否定的形象であることは確かだとしても、その否定の仕方は単なる戯画化によるものではなく、これらの人物には徹底した可笑し味と澁刺たる vitality が与えられている。それに反して Cade の首を国王に差出す Alexander Iden は確かに「肯定的形象」ではあるが、Cade とは対照的に全然面白味がなく、まったく退屈な人物となっている。

Cade の論理の奔放な飛躍が一つの climax に達するのは、彼が叛徒たちを前にして自分の platform を発表するところ (II. 4. 2. 62-82) であるが、周知の台詞なので引用は省略する。ここで彼が調子づいて “...and when I am king, as king I will be...” と言うとき、民衆は “God save your majesty!”

と歓呼するが、わずか20行ばかり前に演説の冒頭で Cade が “...our enemies shall fall before us, inspired with the spirit of putting down kings and princes…” と述べたことを、本人も彼の演説の聴衆もすっかり忘れていゝる。もちろん観客は忘れるはずがなく、その comic irony を理解することができる。

彼の台詞を serious に考えればもちろんその内容は grim であることが多いけれども、それらはまとっている comic な衣裳と表裏の関係にある。そのほか印象に残る点を列挙してみよう。彼は必要になれば自分で自分を knight に叙することを知っている (4. 2. 116—117)。彼の三段論法によると、Lord Say はフランス語を話すことができ、フランスは敵国であるから、したがって Lord Say は謀反人である (4. 2. 161—169)。彼は Dick の功績にたいし職業上の独占的特許を与え (4. 3. 3—7) たり、 “...my mouth shall be the parliament of England” (4. 7. 13—14) と宣言したりして、次第に独裁者の風貌をおびてくる。学校を建てたり、印刷したり、紙工場をつくったりすることは彼によると許しがたい犯罪行為である (4. 7. 21—42)。彼は初夜権を要求する (4. 7. 116—114)。最後に彼が叛徒たちに見捨てられるときの台詞、 “Was ever feather so lightly blown to and fro as this multitude?” という、民衆の政治的な立場について言い古された conventional な感想（例えばこの作品について言えば III. 3. 1. 80 以下の King Henry の台詞参照）は、それを口にする人物が人物だけに独得の喜劇的効果がある。

Cade 以外の人物で最も comic なのは Smith である。Earl of March には双生児が生まれ、そのうち兄のほうは乞食女に盗まれ、自分の血統を知らずに育ち、成人して bricklayer になったが、その息子こそ自分に他ならない——と言って Cade は Stafford の前で王位継承権を主張する。その奇抜な inventiveness も面白いが、Smith の証言がまた秀逸である。

Sir, he (i.e. Cade's father) made a chimney in my father's house,  
and the bricks are alive at this day to testify it, therefore deny



it not.

(4. 2. 145-147)

彼が自分の提出する論拠の誤りに気付いていないとしても面白いが、気付いて意識的にもっともらしく証明しているのだから尚更である。

Ashford の butcher である Dick は羊や牛を屠殺場でほうむるように獅子奮迅の働きをして Cade を助けるのだが、彼は Cade の royal birth など信じてはいない。Smith もまた Cade の素姓をよく知っており、Cade の母が Plantagenet などではなく、行商人の娘であったことを別の場面で証言している。Cade が群衆を前にして自分の royal birth を主張したとき、Dick と Smith は aside で Cade の speech ひとつひとつに機知にあふれた論評を加えて反駁している。この二人が Cade の最も有力な支持者であって、貴族たちにむかっては Cade の royal birth を主張するという点が面白い。だから引用した台詞は Smith の愚かさを示すものではなく、逆に彼のあなどりがたい才知を示すものである。

Irving Ribner は Jack Cade の途方もない政治的プログラムをあらわす台詞 “There shall be in England……go to grass” (II. 4. 2. 63-67) と Alexander Iden の受容的な秩序観をあらわす台詞 “Lord, who would live… from my gate” (II. 4. 10. 16-23) とを対比させて、次のように説明を加えている。「各人は自分に割り当てられた地位を守り、それ以上のものを望んではならない。自分の地位を越えた志を抱くものは、神によって定められた秩序をおかすことになり、このような侵犯は、それがとくに地上における神の代理者にたいする反逆の形をとるときには、必然的に神罰を受けることになる。… Iden が受け入れ、そして Cade が破壊しようとする秩序は、人類のために企画された神慮である。Hall と Shakespeare の考えた歴史の教訓は、もしこの秩序が破壊されたら、それが回復するまで神の罰が England を悩ます、ということである。この教訓を *Henry VI* 三部作は鮮かな表現で説明している。<sup>(12)</sup>」

これにたいし S.C. Sen Gupta は、Jack Cade の諸場面の劇的興味は Jack

Cade の性格から生ずるものであって、彼の犯罪に 含まれる政治的な意味にあるのではないと述べ、次のように Ribner を批判している。「Irving Ribner はこれら二つの台詞を並置し、その対照が意味する政治的教訓を引き出そうとする。しかし彼は次のことに気付かない。Iden の台詞は *verse* で書かれているが散分的で退屈であるのに、Cade の台詞は劇的で生き生きしている。Iden を想い出せない読者は多いかもしれないが、Jack Cade を忘れる読者はいないであろう。」<sup>(13)</sup>

Jack Cade という人物が *dramatic* で澆刺としているに反して、Iden のほうは台詞も人物も平凡で陳腐であることは確かであるが、そのことを指摘することが I. Ribner の意見にたいする充分な批判になるとは思えない。つまり両者の主張は次元が異なるのである。劇全体の構成から見てあまり重要でない人物に *chorus* 的な台詞が与えられることは珍らしくない。すでに紹介した *Richard II* の Gardner などその一例であり、*Henry VI* では Iden の他に Exeter がときどき *chorus* 役を引き受ける。逆にまた精彩ある描写が与えられたからといって、必ずしもその形象の否定的性格を抹消できない場合もある。だから I. Ribner の示す対照にはやはり一つの客観的な意味があると思えるのである。

Alexander Iden という人物との対照をかりに無視しても、作者の意図は明らかである。すなわち、Jack Cade に劇的な面白味を与えれば与えるほど、彼の言動の不合理と自家撞着の生み出す可笑し味が観客をとらえ、観客はそれを楽しみながらその可笑し味によって教育されるのである。換言すれば、場面や人物に滑稽味があればあるほど観客の同化作用を妨げ、彼らの ‘*level of awareness*’ を高め、ある認識的な効果を与える。だから Jack Cade が *vivid* な形象であるという理由で政治的な *implication* を否定することはできない。むしろその逆のことが言えるのではないだろうか。もちろんこのことは作者自身もおそらく大いに楽しみ興に乗じながらこれらの場面を創造したと矛盾しない。

史劇に登場する民衆については、「彼らのほとんどが一つの *joie de vivre* を

もっていて、それが史劇の内容をなす激しい敵意と残虐な行為に加えて、変化と豊かさを与える<sup>(14)</sup>』ということが言える。しかしこのことは Jack Cade の諸場面から思想的な意味を引き出す妨げにならない。そしてこれらの場面はその comic な明るさと vitality で作品全体に変化を与えるという効果をもつだけでなく、England の病根が深く社会の底辺にまで浸透していることを暗示し、国内の動乱があらゆる階級階層に及んでいるという普遍的包括的な印象を与えるという効果をもっている。

## 〔VII〕

Ireland にむかって出発する直前の、York 自身の独白によると、Jack Cade をそそのかしたのは他ならぬ York であるということになる。この独白で描写される Jack Cade と、前章で考察した Jack Cade とは全然異なった人物と言ってもよいほど矛盾している。J. D. Wilson はこの独白について “The broken line…suggests that Shakespeare left untouched this description of Cade. It contains nothing to prepare us for the character in Act 4, which is indubitably Shakespeare’s” と説明しているが、一方このような ‘divided authorship’ 説にたいしては異論も多い。かりに J. D. Wilson の説を採用するにしても、Shakespeare が York のこの独白について responsible でないと主張することはむずかしい（この問題は最後の章で再びとりあげる）。それではこの食い違いはどのような意味をもっているのであろうか。

York がわれわれに紹介する Jack Cade は、アイルランド軽歩兵部隊と果敢に闘って、両腿がやまあらしのような有様になってもひるまない剛胆の勇士である (II. 3. 1. 360-363)。また変装してしばしば敵中に潜入し情報をあつめる知恵と策略の持ち主でもある (367-370)。かりに捕われて拷問にかけられても、York との関係を白状するような男ではない (376-378)。第四幕の Jack Cade とはちがって、ここで描かれる Jack Cade は Holinshed の “sober in talke, wise in reasoning, arrogant in hart, and stiffe in opinion”<sup>(16)</sup> という記述と矛盾しない。はるかにふくらんでいてぴったり一致というわけに

はゆわないが、少くとも矛盾はしていない。

このような Jack Cade を York は ‘a minister of my intent’(3. 1. 355) として利用するわけであるが、両者の関係について J. D. Wilson は “...the chroniclers say nothing of any personal relations between York and Cade, still less of York’s having been earlier in Ireland” と注を与えて<sup>(17)</sup> いる。例えば Holinshed の説明は次のようになっている。“Those that favoured the duke of Yorke, and wished the crowne vpon his head, for that(as they judged) he had more right thereto than he that ware it, procured a commotion in Kent on this manner. A certaine yoong man, of a goodlie stature and right pregnant of wit, was intised to take vpon him the name of John Mortimer, coosine to the duke of Yorke.”<sup>(18)</sup>

York の独白のなかで、Cade が York の手先たりうるほど才知と勇氣にすぐれた人物にされていること、また彼と York との関係が personal なものとされたことは、与えられた場面の劇的な緊張を高め、その意味でこの場面だけをとり出して考えれば真実性がある。つまり前後の照応と細部の正確さよりも dramatic force が問題となるのである。

第四幕の Jack Cade は、それはそれで Henry VI 三部作全体のなかでしかるべく位置づけられており、このような描き方には必然性がある。暴徒の指導者として観客の前に現われる Jack Cade の姿が、York の与える彼の肖像画から遠ければ遠いほど第四幕のイデオロギー的な基礎がそれだけ明白になってくると言えよう。前者が後者と食い違っているのは、dramatic force とその場面の真実性がそうさせるのにたいし、後者が前者と食い違うのは Henry VI 三部作全体のテーマと思想的な背景がそうさせるのである。次元の相違はあるけれども、それぞれが文脈に最も適当し、最も強い印象と効果を与えるものとして組みこまれている。

Jack Cade およびそれに従う暴徒たちとは対照的な、別の姿を見せる民衆についてはすでに言及した。彼らは国王にたいする ‘instinct of love and loyalty’ に動かされて Suffolk の追放を叫んだ。観客はそのとき舞台裏にひ

しめいている(ことになっている)群衆に自分たちを同化させたわけであるが、このような心情は絶対君主による統一主権の実現という歴史的な事業が完成されたばかりの幸福な時代にふさわしいものであった。しかし対照と同時にここには類似点もみられる。いずれも暴動を起している民衆であり、興奮しやすく暴力的な傾向が見られる。Jack Cade 諸場面に登場する mob も本質的には保守的であり、体制に順応しやすい。一見したところ revolutionary に見えることもあるが実はそうでない。彼らが結局 Cade を見捨てるのもそのためである。

この作品に登場する民衆のうちで、戦場で自分の子供を殺した父親と、自分の父親を殺した息子 (III. 2. 5.) もまた消えがたい印象を残す。いつの時代でも戦争で一番損な役割にまわるのは民衆である。

Whiles lions war and battle for their dens,

Poor harmless lambs abide their enmity. (III. 2. 5. 4-5)

この台詞の 'lions' は 'kings and feudal lords' に、'harmless lambs' は 'common people' にそれぞれ置き換えて読むべきである。この場面で肉親を殺した二人にかなり長い台詞が与えられているにもかかわらず、彼らは名前のない登場人物である。つまり彼らは戦場に駆り出された父親一般、息子一般であり、impersonal な人物である。

Symbolical なこの場面がおかれている文脈にはあきらかな irony がある。彼らが肉親の死体を引きずって登場する直前に Henry は何をしていただろうか。小高い丘の上に立って血生臭い戦闘を傍観しながら、彼は羊飼いとなった自分を空想し、

Ah, what a life were this! how sweet! how lovely! (III. 2. 5. 41)

などと民衆の生活を羨望していたのである。しかし彼が空想の中で羨望した民

衆はいや応なしに悲惨な内乱にまきこまれていた。彼のすぐ眼の前で演じられる象徴的な悲劇は彼の感傷を冷たく打ちくだいた。だから次の場面で Clifford が

The common people swarm like summer flies:

And whither fly the gnats but to the sun?

And who shines now but Henry's enemies? (III. 2. 6. 8—10)

と嘆いたとしても、それは彼が自分の立場を相対化できないからだということがわかる。感傷から眼覚めたときに

How will the country for these woeful chances

Misthink the king and not be satisfied! (III. 2. 5. 107—108)

と自分を責める Henry のほうがはるかに立派に自分の立場を相対化し、民衆の眼で自分を観ようとしている。被害者である民衆にとって、国王や貴族たちの争いなどはどちらが勝とうと問題ではない。いずれにせよ早く決着がつけばよいのだ。だから

Wither one rose, and let the other flourish;

If you contend, a thousand lives must wither. (III. 2. 5. 101—102)

と Henry が独語するとき、彼ははからずも “...let them fight that will” (2. 5. 121) という民衆の厭戦的な気持を代弁するのである。

## 〔Ⅷ〕

この作品の示すところによれば、英国が次第にフランスに破れて行った原因として考えられるものもまた、英国側の分裂と不団結を生み出した以上のように

な事情に他ならない。現代人のわれわれは、先にも述べたように、フランス側で生まれて来た国民感情と国家的な団結もこれに匹敵する大きな原因であることを知っている。しかしもちろんこのような理解を Elizabeth 朝時代に生きた Shakespeare に期待するのは無理なことである。それに加えて、当時の英国人にとって nationalism というものは、相手国の national な立場をも認め、敵国国民の愛国心をも評価するという相対的なものではなかった。すくなくともフランスにたいしてはそうであった。

nationalism の相対性という言葉の意味を *Saint Joan* の heroine は明確に説明している。「イギリス兵だってやっぱり人間です。神様は私たちとちょうど同じようにイギリス兵をもおつくりになりました。けれども神様はあの人たちにあの人たちの国と言葉をお与えになったのだから、あの人たちが私たちの国へ入りこんで来て私たちの言葉を話そうとすることは神様の御意志にそむきます。……神様はイギリス兵にも慈悲をおかけになります。自分の国へ帰ればあの人たちだって神様の善良な子供らしく振舞うでしょう。黒太子のことは私も聞いています。あの人是我たちの国の土を踏んだとたん悪魔にとりつかれたのです。自分の国では、つまり神様があの人のためにおつくりになった国にいたときには、あの人のもやっぱりいい人でした。……私がもし神様の御意志にそむいて、イギリスを征服するために攻めこんで、そこに住もうとしたりイギリスの言葉を使おうとすれば、わたしだって悪魔にとりつかれるでしょう。」これは historical character としての Joan の台詞ではあるまいと思われる。農民階級出身の無学な一少女がここでは G. B. Shaw の mouthpiece となっている。そして彼女の素朴な銜いのない言葉に作者が説得力をもたせているのは流石である。

S. C. Sen Gupta が Shakespeare の愛国心について論ずるとき、彼の議論には以上のような現代的な観点が忍びこんでくる。彼はまず「もし Shakespeare の歴史劇を政治的な教訓劇と解釈すれば、いたるところで混乱と矛盾に出会うであろう」と一般論——すなわち Shakespeare には政治的な moralization がみられないという趣旨の——を述べ、nationalism の問題につい

ては次のように論じている。「もし nationalism を説教することが彼の主な意図だったとすれば、何故彼は *King John* において外国からの侵略にたいする全国民の団結した抵抗を呼びかけ、一方 *Henry V* で外国にたいする侵略をそそのかしているのか？ *Henry VI* の第一部では、不思議なことに愛国的な調べを奏でるのは英国の貴族たちではなくて英国の敵 Pucelle と Burgundy 公である。Joan は自分の国を外国の支配から解放する使命を神から授かったと信じている。そして彼女は三部作全体の中で ‘country’ とか ‘countrymen’ とかについて語るただひとりの人物である。」彼はさらに、Burgundy の ‘patriotic sentiments’ にたいする ‘a fervent appeal’ である彼女の台詞、 ‘Behold the wounds……thy country’s stained spots’ (I. 3. 3. 50—57)を引用し、これにたいし「もし Shakespeare が ‘England’ を彼の歴史劇の主役にするつもりであったとすれば、彼女を愛国的抵抗の代弁者にしなかったであろう」と論評を加えている。

彼が *King John* と *Henry V* との間にあると主張する矛盾については、実はこれが矛盾でなく首尾一貫したものであることをすでに別の機会で述べた<sup>(20)</sup>ので、ここでは *Henry VI* について考えてみよう。英国の貴族たちが愛国者として描かれていないという指摘は、それはそれとして正しいけれども、必ずしも彼の主張を裏付ける論拠にはならない。何が描かれているかということと、それがどのような立場から描かれているかということは一応別問題だからである。さらにまた Pucelle について言うと、S. C. Sen Gupta の文章だけを読むとあたかも彼女が独立と解放の champion であるかのような印象を受けるが、全体的な文脈は全然異った彼女の肖像画を与える。あくまで *Henry VI* における Pucelle は魔女であり、‘fiends’ に自分の血を吸わせ、その代償として彼らの奉仕を受けとっていた。今まで手下として彼女のために働いていた彼らが彼女を見捨てたとき(I. 5. 3.)以来彼女は完全に無力となり、また愛国者としての仮面も消えうせる。York に捕われたときにはフランス国王を呪いさえる(I. 5. 3. 39—41)ようになる。彼女が witch として描かれている諸場面を考慮に入れながら全体的に考察すれば、Burgundy をたちまち説得したの



も彼女が witch であったからこそ可能であったと考えることさえできる。S. C. Sen Gupta の考え方の根底には、例えばフランスにたいする英国の侵略と英国にたいするフランスの侵略について、“…a moralist Shakespeare must have realized that the difference between the two was as between tweedledum and tweedledee” という前提がある。そして私にはこの前提が疑わしく思われるのである。

同様な前提が A. A. Smirnov の論述にもみられる。たしかにフランスの国民的英雄 Joan of Arc の戯画化は現代人のわれわれにとってあまり愉快なものではない。そこで彼は何とかして Shakespeare に免罪を与えようとして次のように述べている。「Shakespeare の愛国主義は言うまでもなくきわめて強かった。だが彼は決して愚劣な国民主義の形態にまで達したことはない。……*Henry VI* の第一部は Shakespeare の書いたものではないと言うことが現在実証されている。<sup>(21)</sup>」しかし残念なことに Smirnov が喜ぶのはすこし早すぎるのであって、そのことを示すためにも私は最後に authorship の問題についてなくもがな解説的な一章を付け加えた。

Elizabeth 朝時代の人々の国民感情が国外に向けられた場合、その相手は主として Spain と France とローマ教会であった。Spain は旧教諸国の盟主であり、英国の侵略を企図した実行を試みもしたのであるから、この国にたいする激しい敵愾心は容易に納得できる。France の場合はどうであったかと言うと、Cade に従う暴徒たちの感情をうまくつかんで彼らを説得しえた Clifford の台詞

To France, to France, and get what you have lost. (II. 4. 8. 49)

が暗示するように、France はもともとイギリスのものであったのにばら戦争の間に「失われたもの」だった、というのが Elizabeth 朝時代の人々の意識だったのではないだろうか。このことは *Henry V* を解説するとき J.D. Wilson<sup>(22)</sup> も示唆しており、*Henry V* の対仏侵略について、“The war against France

is a righteous war; and seemed as much so to Shakespeare's public as the war against the Nazis seems to us<sup>(23)</sup> と説明している。Elizabeth 朝時代に身を置いて考えてみると、もし Henry V の対仏戦争が正当化されるのなら、同じ理由によって、France 側の英雄を witch あるいは harlot として描くことも正当化されうる。

Edward Hall の前掲書は、英語で書かれた最初の史書で、国家的統一の理念に貫かれた画期的なこの書物の内容は、当時のイギリス人の間に広く受け入れられていた。この書物は「Mary 朝で焼却処分に付せられたが、そのことがさらにいっそう Elizabeth 朝で迎えられる結果となった。」<sup>(24)</sup> その Hall は France 側の nationalism をどう見ていたであろうか。S. C. Sen Gupta でさえ次のように指摘している。「いかなる力よりも決定的だったのは復活したフランスの nationalism, すなわちフランス人がイギリス人の軛をふり落とし、Dauphin にたいする忠誠を再び主張したことである。しかし、…Hall にとってこのことはフランス側の裏切り、欺瞞、背信などの徴候であった。」<sup>(25)</sup> 例えば、フランス側に立って考えれば Burgundy に国民的な自覚が生まれたということも、イギリス側に立って考えると裏切りであり背信だったということである。以上のように見てくるとイギリス側の nationalism とフランス側の nationalism とを同列に論ぜよと Shakespeare に要求するのは無理であることが理解されよう。

*Saint Joan* の heroine にはいままで何度かふれたが、ここでこれを最後としてもう一度言及したい。問題は、*Henry VI* における Joan の形象化と、*Saint Joan* における魅力的な愛国者としての Joan の描き方の対比にあるのではない。両作品の基調になっている nationalism の性格が問題なのである。それぞれの国の主権と独立を尊重し、相互不干渉を主張するきわめて現代的な G. B. Shaw の Joan にたいし、Robert は自分が直属する feudal lord にたいする忠誠のみを問題にする。後者の立場は、封建社会における重層的な土地所有関係の段階的構造から生ずるものであって、nationalism 以前のものである。すなわち Robert と (G.B. Shaw) の Joan の間にあるものは、loyalty

にかんしては対照であり nationalism に関しては飛躍である。その間にあって両者をつなぐ中間項の一つが Shakespeare 的な nationalism であると言える。

## 〔IX〕

この作品の authorship について論じるときには、Robert Greene の書いた *Groats-worth of Wit* という pamphlet が必ず問題にされる。この pamphlet の中には Shakespeare を攻撃した一節があり E. Malone から J. D. Wilson にいたるまで、Greene が非難したのは plagiarism のためであるとする学者も多い。問題の一節には *Henry VI* 第三部中の一行、“…tiger’s heart wrapped in a woman’s hide!” (III. 1. 4. 137) の parody である “Tygers hart wrapt in a players hyde” (=tiger’s heart wrapped in a player’s hide) という表現があるので、*Henry VI* 三部作は初め Greene その他の作家が創作したものに Shakespeare が revision を加えたものであるとこれらの学者は考えるのである。この見解は前世紀の終りから今世紀の始めにかけて有力であった。

これにたいし、W. W. Greg, Peter Alexander, E. K. Chambers などは、plagiarism が行なわれたから非難したのではなく、Shakespeare を生意気だと思って攻撃したのだ、と主張する。かりに一步譲って Greene が非難したのは plagiarism であるとしても、その非難が当を得ていた——すなわち実際に plagiarism が行われた——という結論は必ずしもそこから生じないわけである。

第一部の text は First Folio に含まれているものだけである。それは 1623年11月8日、他のすべての Shakespeare の作品と一緒に Stationer’s Register に「*Henry VI* の第三部」として登録された。すでに第二部と第三部が出版されていたという事情のため、出版者は誤って第一部を第三部として意識したのであろう。もっとも第一部が最初に書かれたと考える学者もあり、New Arden 版の editor である A. S. Cairncross はその一人である。

この text にはいくつかの矛盾や混乱がみられるので、第一部についてはこのことも divided authorship 説を有力にしている。例えば J.D. Wilson は、大部分が Thomas Nashe と Robert Greene によって書かれ、その後 Shakespeare によって完成されたものであると主張している。他の学者はまた、Peter Alexander の説に従って、この作品は Shakespeare 一人によって創作されたものであると論じている。そして矛盾と混乱は Shakespeare 自身の未訂正の原稿（いわゆる foul papers）が‘copy’<sup>(26)</sup>であったためであると説明する。A. S. Cairncross はこの立場に立っている。

第二部と第三部はいわゆる ‘Contention plays’ の存在が問題を複雑にしている。‘Contention plays’ というのは、1594 年に *The First Part of the Contention betwixt the two famous Houses of York and Lancaster* という title で出版されたもの（これが *Henry VI* 第二部の bad quarto）と、1595 年に出版された *The True Tragedy of Richard Duke of Yorke*（これが第三部の bad quarto——実は octavo であるが）の二つである。これらの戯曲は二つとも 1600 年に再版され、さらに 1619 年には他に六戯曲が加えられて *The Whole Contention between the two Famous Houses, Lancaster and Yorke* という title で出版された。この 1619 年版の title page には作者が Shakespeare であると記されている。

Edmund Malone は、これら Contention plays が University Wits の一人によって書かれたものであると見なし、それらの Shakespeare による revision がそれぞれ *Henry VI* の第二部と第三部であると論じた。それ以来今世紀の始めまで、多くの学者は E. Malone の説に従って Contention plays が non-Shakespearean であり、source plays であると信じて来た。Contention plays の作者については定説がなく、候補者として Christopher Marlowe, Robert Greene, Gorge Peele, Thomas Nashe, Michael Drayton などの名前が挙げられた。*Groats-worth of Wit* における Greene の Shakespeare 攻撃は、もちろん彼らの説を支えるために援用された。

ところが 1929 年になって、Peter Alexander は *Shakespeare's Henry VI*

and *Richard III* という本の中で, *Contention plays* がいわゆる ‘bad quartos’ であること, それが ‘memorial reconstruction’ (俳優によって記憶された台詞が印刷の ‘copy’ になること) によるものであることを主張した。もっともこの説は彼が初めて唱えたものではなく, Thomas Kenny という学者が *Life and Genius of Shakespeare* (1864 年) の中ですでに同様な主張をしていた。しかしこの本は世人に顧みられず忘れ去られたので, Peter Alexander はその本の存在を知らずに, 自分の研究を独自に行ったのである。Peter Alexander の説は今日広く受け入れられているが, 一方これに批判的な学者もある。

ここではこの面倒な問題にこれ以上深入りする必要はない。Shakespeare が三部作全部を自分で創作したとみなす場合はもちろん, 彼が他人の書いたものを revise ないし complete したと考える場合にも, やはりこの三部作すべてにたいし最終的には Shakespeare が responsible であることは以上で明瞭だからである。彼が部分的に加筆したり訂正したりしたと仮定しても, それは全体としての構造的な均衡を無視しては不可能な作業である。すなわち Shakespeare が手をつけずにそのまま残したところも, 一応彼の吟味を(それがいかに hasty なものであろうとも) 経たわけであるから, 手を加えなかった部分についても彼は responsible であるということになる。

#### 注

- (1) この要請がブルジョア的なものであったという点については, 齊藤美洲『英国近代精神の胎動』120 ページを参照。
- (2) J. D. Wilson, *Henry VI, Part III*, Notes, p. 191.
- (3) 以下の説明は主として齊藤美洲氏の前掲書 120—121 ページに依拠している。
- (4) Irving Ribner, *The English History Play in the age of Shakespeare*, p. 104.
- (5) S. C. Sen Gupta, *Shakespeare's Historical Plays*, p. 22.
- (6) Irving Ribner, *op. cit.*, pp. 105—106.
- (7) A. T. Quiller-Couch, *Historical Tales from Shakespeare*, pp. 214—215.
- (8) *Ibid.*, p. 229.
- (9) *Ibid.*, p. 237.
- (10) S. C. Sen Gupta, *op. cit.*, p. 40.
- (11) A. T. Quiller-Couch. *op. cit.*, p. 245.

- (12) *Op. cit.*, pp. 103—104.
- (13) *Op. cit.*, p. 25.
- (14) S. C. Sen Gupta, *op. cit.* p. 41.
- (15) J. D. Wilson, *Henry VI, Part II*. Notes, p. 157.
- (16) *Holinshed's Chronicle* (Everyman's Library), p. 116.
- (17) *Op. cit.*, p. 157.
- (18) *Op. cit.*, p. 113.
- (19) S.C. Sen Gupta, *op. cit.*, pp. 20—21.
- (20) 拙論『Shakespeare の nationalism』(「明治大学教養論集」46号) pp. 59—63.
- (21) A. A. スミルノフ著, 馬上義太郎訳『シェイクスピア——その世界観と芸術』133 ページ。
- (22) J. D. Wilson, *King Henry V*, Introduction, p. xxiii.
- (23) *Ibid.*, p. xxiv.
- (24) 齊藤美洲, 前掲書, 122 ページ
- (25) *Op. cit.*, p. 60.
- (26) 印刷業者によって印刷のために用いられるテキストを指す。‘copy’ の研究における pioneer は W. W. Greg である。